

報告

2020 年度徳島大学全学 FD 推進プログラムの実施報告

齊藤隆仁¹⁾ 吉田 博²⁾ 塩川奈々美²⁾ 飯尾 健²⁾

1) 徳島大学教養教育院 2) 徳島大学高等教育研究センター

要約：徳島大学では、2002 年度から全学 FD 推進プログラムを通じて、FD の体系化、組織化、日常化を推進してきた。2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、ほとんどのプログラムをオンラインで実施した。教員個人の教育力向上を目的とした「すぐ使える 90 分セミナー」、「授業設計ワークショップ」では、オンライン授業ですぐに活用できる教育方法やツールを紹介した。「大学教育カンファレンス in 徳島」、「すぐ使える 90 分セミナー」はオンラインで学外に公開することで、学外からの参加が多数あった。また、新たに博士後期課程の大学院生を対象としたプレ FD プログラムも実施した。本年度実施した各プログラムの概要を記載し、アンケート結果等からうかがえる成果と今後の課題について考察する。

(キーワード：教育の質保証、教育力開発コース、大学院生プレ FD、オンライン研修)

2020 Annual Report on Faculty Development Programs at Tokushima University

Takahito SAITO¹⁾ Hiroshi YOSHIDA²⁾ Nanami SHIOKAWA²⁾ Ken IIO²⁾

1) Institute of Liberal arts and Sciences, Tokushima University

2) Research Center for Higher Education, Tokushima University

Abstract: Tokushima University has been promoting the systematization, organization, and reutilization of faculty development (FD) through the university-wide FD promotion program since FY2002, and in FY2020, most of the programs were conducted online due to the spread of the novel coronavirus infection. "90-minute Seminar for Immediate Use" and "Class Design Workshop" were held to improve the teaching skills of individual faculty members. The "University Education Conference in Tokushima" and the "90-minute Seminar for Immediate Use" were open to the public online and attracted many participants from outside the university. In addition, a new pre-FD program ("Preparing Future Faculty Development") for doctoral course graduate students was conducted. The following is an overview of each program conducted this year, and a discussion of the results and future issues based on the questionnaire results.

(Key words: Quality of Education, Educational Development Course, Preparing Future Faculty Development for graduate student, Online training)

1. はじめに

2020年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大により、大学での対面授業が禁止され遠隔授業のみが実施される時期もあり、教育のあり方、大学の存在意義を改めて問われる年度となった。ポストコロナにおいて従来の教育方法に戻すのではなく、世界で実施された取組を参考に新たな学修の場を構築する取組が求められている。このような状況下において、全学FDの果たす役割は大きい。授業方法の変更を余儀なくされた教員に対する支援に加え、大学の果たすべき役割を明確にし、新たな教育改革を推進していくための議論を加速させること、各学部・学科における教育プログラムの質保証においてもFDに期待される

ところが大きい。

このような背景から、2020 年度全学 FD 推進プログラムは、大学執行部及び学部等への提案や連携を行いながら教育改革を進め、教員の職能開発の観点から、学び合いの場（機会）を提供することにより、更なる教育の質向上と相互に高め合う SoTL (Scholarship of Teaching & Learning) 実践活動の文化を形成することを基本方針とした。具体的には、1) 教育改革 FD、2) 教育の質保証 FD、3) 教育力開発 FD、4) 総括的な FD の 4 つの観点から全学 FD を実施し、多くのプログラムをオンライン形式で学内外に発信した。

以下、今年度の各 FD の具体的内容とその成果を述べる。
(齊藤隆仁)

2. 教育改革に関する勉強会・意見交換

徳島大学の教育改革を遂行するために、徳島大学理事(教育担当)と全学 FD 推進プログラムの実施を支援する高等教育研究センター教育改革推進部門は、大学教育改革の動向及び徳島大学の現状について、意見交換を行い、具体的な教育改革の取組について提案・検討を行っている。本 FD はマクロレベルの FD (教育改革 FD) として位置づけられており、教学マネジメントを支える基盤としての役割も期待されている。2020 年度は、主に徳島大学の教学アンケートの実施体制の見直し、ポストコロナを見据えた徳島大学の教育改革について検討した(表 1)。

教育改革や FD に教学データを活用することは重要であると指摘されている。教学 IR に関する実施体制の面では、高等教育研究センターに教育の質保証支援室が設置されている。しかし、データ収集に関する既存組織との調整が十分とは言えず、調査の重複、データ管理が一元化されていない等の課題が残されている。本 FD では、2021 年度以

降の具体的な体制の検討も行われ、教学 IR の発展に寄与することができたと考えている。また、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、社会の変化がより一層加速する中で、大学教育のあり方も問われている。ポストコロナに向けて、今後大学は大きな変革が迫られることになるかと予測される。このような状況下において大学執行部と高等教育開発を担う教育改革推進部門との意見交換は大きな意義があったと考える。

引き続き全学 FD 推進プログラムは本学の教育改革、教育の内部質保証に関わる取組を通じて、学習者本位の大学教育を実現することに貢献することが期待されている。(吉田 博)

3. 教育の質保証FD

a. ねらい・背景

徳島大学では 2018 年度に「徳島大学における教育の内部質保証に関する方針」等が定められ、学部等ごとに「教育プログラム評価委員会」が設置された。各教育プログラム評価委員会では、「プログラム評価・改善実施手順」を定め、教育プログラムの評価・改善を進めるうえでの体制整備が行われた。2020 年 1 月 22 日に中央教育審議会大学分科会より示された「教学マネジメント指針」においても、教育プログラム評価・改善をエビデンスに基づき、実質的に実施していくことが強く求められており、徳島大学でも実態を把握し、全学的な支援及び情報提供、組織間の連携等を進めることが必要であると言える。

そこで、各学部等で行われている教育プログラムの評価・改善に関する課題やニーズを把握し、挙げられた課題やニーズに応じて、全学的な支援及び情報提供、組織間の連携等を行うことを目的とし、各学部等のプログラム評価委員会を対象に実施した。その結果、プログラム評価の意義や必要性に関する理解を共有すること、技能領域や態度領域も含めて客観的に評価するための具体的な方法とエビデンスを整理することが、多くの学部学科等で必要であることが明らかになった。

これらの背景のもと、各学部等の教育プログラムの評価・改善について、客観的な指標に基づいた透明性のある評価、改善の計画を作成すること

表 1 教育改革に関する勉強会・意見交換

回	実施日	内容
1	4 月 28 日	・全学 FD 推進プログラム ・教学マネジメント指針
2	5 月 25 日	・教員対象アンケートの改訂
3	6 月 29 日	・教員対象アンケートの改訂
4	8 月 17 日	・授業設計ワークショップの概要 ・教育の質保証に関する意見交換
5	9 月 25 日	・教学アンケートの改革について ・徳島大学におけるポストコロナを見据えた教育改革
6	10 月 27 日	・教学アンケートの改革について ・徳島大学におけるポストコロナを見据えた教育改革
7	11 月 30 日	・教学アンケートの改革について ・徳島大学におけるポストコロナを見据えた教育改革 ・大学教育カンファレンス in 徳島
8	1 月 26 日	・教学アンケートの改革について
9	2 月 5 日	・教育プログラムレベルの評価

場所：理事(教育担当)室 [本部庁舎 3 階]

を目的とした教育の質保証 FD を計画し、2020 年度は薬学部薬学科が、2021 年度より歯学部、教養教育院が実施することとなった。

b. 概要

FD の具体的な内容は、高等教育研究センター教育改革推進部門スタッフと学部の教育プログラム評価に関わる学部等の担当者が、プログラム評価の取組を確認し、当該学部等が目指す取組の実現に向けて課題や対応策等を検討する。打ち合わせを重ねながら、部門スタッフが必要な情報を提供し、当該学部等の文脈に合わせた実現可能な評価・改善計画を作成するものである。

2020 年度より実施希望のあった薬学部に対して、打ち合わせを始めるにあたって、事前確認として、①本 FD の実施を希望した理由、②本 FD で知りたいこと、実現したいこと、確認したいこと、③大学教育委員会で定めた教育プログラムの 8 つの評価対象に対し、現状の取組を記載してもらう「プログラム評価リスト」の作成を依頼した。今後は、これらの事前確認事項をもとに、具体的な打ち合わせを開始する予定であり、希望のある学部等への同様の実践も進めることとしている。2020 年度の教育の質保証 FD としての取組はここまでである。

c. 成果と課題

徳島大学は、教育プログラムの評価、改善に関する取組として、方針の策定、組織の整備が行われてきた。今後は、それらの組織、方針の下で具体的な実践が求められるところである。実際、2021 年度より大学教育委員会において、各学部等の教育プログラムについて、上述した 8 つの評価対象のうち、年度ごとに重点評価項目を定め、全学的に実態を把握、共有する取組が始まる。しかし、上記の調査においても明らかになったように、各学部担当者がプログラム評価の意義や必要性を理解すること、エビデンスによる客観的な評価方法を理解することも重要である。本 FD は、徳島大学の進める教育の質保証に関する取組と連携し、大学としての教育改革と FD としての支援がかみ合うことで、より実質的な改革が進展すると考える。

(吉田 博)

4. 教育力開発コース

教育力開発コースは、授業設計、授業の実施・改善、教育活動を振り返り、自身の目標を明確にし、改善につなげるといった一連のプロセスを支援するものである。徳島大学においてはこれらの教育活動を重視しており、学外より講師または准教授採用後 1 年以内の教員、及び、学内で助教から講師または准教授昇任後 1 年以内の教員を対象に実施している。対象者は、「授業設計ワークショップ」、「授業実践の振り返り」、「授業参観・授業研究会」を必ず受講することと定めている。ただし、「授業実践の振り返り」において、所属学部の FD 委員長が、提出された「シラバス」、「授業計画書」をもとに、「授業実践の振り返りシート」の各項目を確認し、授業における PDCA サイクルが構築されていることを認め、FD 委員会において承認を得た場合は、「授業参観・授業研究会」を免除することができるとしている。さらに、これらのプログラムを受講後 3 年以内に、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」を受講することが望ましいとしている。

4-1. 授業設計ワークショップ

a. 目的

授業設計ワークショップは、授業設計とアクティブ・ラーニングの手法について学び、模擬授業・授業検討会を行うことで、実践的に知識やスキルを修得するものである。本ワークショップの目標は次の 4 つである。

- ① FD 活動の理念、活動計画を理解することができる。
- ② 授業を計画、実施し、評価する方法を体得することができる。
- ③ 授業研究の仕方を理解し、実践することができる。
- ④ FD 参加者同士の仲間づくりができる。

2017 年度から参加者がワークショップの講義部分をビデオ教材で事前に学習してからワークショップに参加する、反転授業形式を導入している。また、2020 年度は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、当初対面研修として予定していた内容を、Zoom を活用したオンライン形式で実施した。

b. 概要

■開催日程

2020 年 8 月 20 日 (木) ～8 月 21 日 (金)

■会場

Zoom (オンライン)

■対象者

本ワークショップは四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (SPOD) へ開放しているが、2020 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、学内の対象者限定で実施した。

学内の対象者は、教育力開発コースの対象者、2019 年度に実施した「授業設計ワークショップ」の欠席者、推薦を受けた者 (助教及び、教授等) としている。ただし、病院及び、プロジェクト採用等の場合は除いた。また、①学外で同様の研修を受けた場合、②担当する授業がない場合、③診療業務を主に担当している場合、についても参加を免除した。

■参加者

2020 年度の参加者は、教員 23 名 (徳島大学の) であり、詳細は次の通りである。

【学内教員】

氏 名	所 属	職 名
河田 和子	総合科学部	准教授
横谷 謙次	総合科学部	准教授
甲田 宗良	総合科学部	講 師
渡邊 克典	総合科学部	准教授
尾矢 剛志	医 学 部	准教授
釜野 桜子	医 学 部	講 師
北村 嘉章	医 学 部	准教授
田中 祐子	医 学 部	准教授
山下 理子	医 学 部	准教授
安藝 健作	医 学 部	准教授
日浅 雅博	歯 学 部	講 師
高石 和美	歯 学 部	准教授
白山 敦子	理 工 学 部	講 師
渡辺公次郎	理 工 学 部	准教授
光原 弘幸	理 工 学 部	准教授
柳谷伸一郎	理 工 学 部	准教授
上野 雅晴	理 工 学 部	准教授
山本 祐平	理 工 学 部	講 師
浅田 元子	生物資源産業学部	准教授

羅 成圭	教養教育院	准教授
大藪 進喜	教養教育院	准教授
段野 聡子	人と地域共創センター	准教授
畠 一樹	高等教育研究センター	講 師

■運営メンバー

運営メンバーは、理事 (教育担当)、高等教育研究センター教育改革推進部門長 (FD 委員会委員長)、FD 委員会委員を含め、教員 15 名、教育支援課職員 3 名の計 18 名であり、詳細は次の通りである。

氏 名	所 属	職 名
河村 保彦		副学長
齊藤 隆仁	教養教育院	副理事
桑原 恵	総合科学部	教 授
常山 幸一	医 学 部	教 授
河野 文昭	歯 学 部	教 授
長谷崎和洋	理 工 学 部	教 授
濱野 龍夫	生物資源産業学部	教 授
友竹 正人	医 学 部	教 授
吉田 博	高等教育研究センター	准教授
塩川奈々美	高等教育研究センター	助 教
渡部 稔	教養教育院	教 授
上田 哲史	情報センター	教 授
上岡麻衣子	高等教育研究センター	特任研究員
金西 計英	高等教育研究センター	教 授
高橋 暁子	高等教育研究センター	准教授
川野 晋資	学務部教育支援課	教育企画室長
白田 智子	学務部教育支援課	専門職員
伊藤 典子	学務部教育支援課	事務補佐員

■内容

2 日間にわたり、表 2 のプログラムを実施した。当初対面形式で予定していたプログラムの通りであるが、「情報交換会」のみ中止した。

■全体の流れ

[1 日目]

「(1) オリエンテーション」では、大学教育改革の流れや、本学の教育改革について説明を行った。

続いて、授業設計ワークショップ全体の流れや教育力開発コースの意図や内容を説明し、昨年度の参加者の声を紹介して、参加者の動機づけを行った。オンライン形式での実施となり、参加者と

の双方向性を確保し、研修に集中して参加してもらうために、Zoom のコメント機能やチャット機能を活用したクイズを取り入れ、操作方法の確認も行った。

「(2) アイスブレイク」では、Zoom のブレイクアウトルームを活用して参加者や運営スタッフが交流を行いながら、お互いについて知ることができるように、事前に送付したワークシートを活用して実施した。

「(3) ワーク 授業設計の基本」では、事前にビデオ教材による講義「アクティブ・ラーニング」と「学習評価の仕方」を視聴した上で参加する、反転授業形式で実施した。教育改革推進部門のホームページで講義ビデオを公開し、簡単なクイズに取り組むことができるようにした。はじめに、事前学習に関する確認として、公開していたクイズの解説を行い、スマートフォンを活用したクイズの作り方を説明した。続いて、反転授業のメリット、デメリットを確認し、授業設計の方法や注意点を解説した。また、オンライン授業に関する学生アンケートの結果をもとに、学生が望んでいる授業のあり方や検討すべき点を解説した。最後に、「学生の学習を促進する事例カード」を紹介し、

授業設計を行う際に検討すべき点を説明し、参加者の授業に取り入れることができそうな事例を確認した。

「(4) ワーク 自身の教育理念」では、教育活動を行う上で、それぞれの教員が大切にしていることを整理しながら、教育理念を意識することの大切さを説明し、教育理念を整理するためのミニワークと「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」の説明を行った。また、Zoom のブレイクアウトルームを活用し、グループ内での共有を行った。

「(5) 講義・ワーク 授業計画」では、シラバスや授業計画書の書き方について説明があり、徳島大学が定める「シラバス作成ガイドライン」が紹介され、目標設定の仕方や、その記述方法が解説された。続いて、これまでの講義やワークを踏まえて、参加者があらかじめ作成したシラバス、授業計画書の検討・修正を行った。その後、Zoom のブレイクアウトルームを活用し、参加者がペアでシラバスを交換して相互チェックを行った。

[2 日目]

「(6) 模擬授業実施 (グループで実施)」では、参加者や運営メンバーがグループごとに各アカウン

表 2 授業設計ワークショッププログラム

授業設計ワークショップ日程 (第 1 日目)

日時: 令和 2 年 8 月 20 日 (木)
場所: オンライン

時 刻	内 容	講師・担当者	備 考
12:30-12:50	・受付 (地域創生国際交流会館フューチャーセンター) ※12:45 までにお集まりください		11:00AM 徳島市に「大雨警報かつ暴風警報」または「洪水警報かつ暴風警報」が出ているら中止
12:50-13:30	(1) オリエンテーション ・はじめに (副学長より挨拶) ・大学教育改革の流れ ・教育の内部質保証方針 ・研修のねらいと意義	吉田 博 (進行) 研修統括幹事 河村保彦 FD委員会委員長 齊藤隆仁	ZOOM ミーティングへ参加
13:30-13:50	(2) アイスブレイク「課題・目標設定」 ・参加者自己紹介・交流	堀川奈々美	ZOOM ミーティングへ参加
13:50-14:00	休憩		
14:00-15:00	(3) ワーク「授業設計の基本」 ・アクティブ・ラーニングの理論と効果 ・成績評価の意義・方法 ・学生の学習を促す授業方法	吉田 博 堀川奈々美	ZOOM ミーティングへ参加
15:00-15:10	休憩		
15:10-16:10	(4) ワーク「自身の教育理念」 ・授業で大切にしていること	吉田 博	ZOOM ミーティングへ参加
16:10-16:20	休憩		
16:20-17:45	(5) 講義・ワーク「授業計画」 ・シラバス・授業計画書の書き方 ・シラバス・授業計画書の修正 ・2 日目の模擬授業の進め方について	堀川奈々美 スタッフ全員	ZOOM ミーティングへ参加

授業設計ワークショップ日程 (第 2 日目)

日時: 令和 2 年 8 月 21 日 (金)
場所: オンライン

時 刻	内 容	講師・担当者	備 考
9:00-9:30	・集合、模擬授業準備 (教材印刷が必要な場合は 9:00 集合)	スタッフ	ZOOM ミーティングへ参加
9:30-12:00	(6) 模擬授業実施 (グループで実施) ・FD 委員紹介、流れの確認 【模擬授業の流れ】(1 人 30 分×4 人 (休憩適宜)) ・シラバス・授業計画書の紹介 (5 分) ・模擬授業の実施 (15 分) ・授業検討会 (10 分) →チェックリストをもとによかった点、改善点等を検討する。	各担当: FD 委員 ワーク支援: スタッフ全員	<模擬授業実施手順> 各グループのオンラインツールへ参加
12:00-13:00	休憩 各自で昼食		
13:00-13:40	(7) 模擬授業の振り返り ・模擬授業検討会を受けて授業の改善点 ・今後のアクションプラン	吉田 博	ZOOM ミーティングへ参加
13:40-14:10	(8) 教育力開発コース概要 ・教育力開発コースの意義・内容	吉田 博	ZOOM ミーティングへ参加
14:10-14:40	(9) プログラムのまとめ ・講評 ・修了証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉	吉田 博 (進行) 研修統括幹事 河村保彦 FD委員会委員長 常山幸一	ZOOM ミーティングへ参加

ト (Zoom ; 4 アカウント, Teams ; 2 アカウント) 教室に分かれて, 参加者全員が模擬授業を実施した。各グループには FD 委員, 高等教育研究センター教育改革推進部門の教員がコンサルタントや司会者として入り, 支援を行った。はじめに参加者が模擬授業を実施する授業のシラバスと授業計画書を説明し, その中からある一部分の 15 分間を切り取り, その模擬授業を実施した。グループの参加者は学生役として模擬授業に参加した。その後, 授業検討会を行い, 参加者がお互いに良い点, 改善点について話し合いながら, 授業を良くするために取り組むことなどを話し合った。

「(7) 模擬授業の振り返り」では, 模擬授業に対する全体的なコメントがあり, その後参加者がワークシートをもとに自身の模擬授業を省察し, グループのメンバーからもらった意見をまとめ, 今後のアクションプランを作成した。その後, Zoom のブレイクアウトルームを活用し, グループ内で共有を行った。最後に, 数名の参加者から, 研修で学んだことやアクションプランを紹介してもらい, 全体での共有を行った。

「(8) 教育力開発コース概要」では, 《授業設計ワークショップ》⇒《授業実践の振り返り》⇒《授業参観・授業研究会》⇒《ティーチング・ポートフォ

リオ作成ワークショップ》と続く「教育力開発コース」の概要や意義が説明された。

「(9) プログラムのまとめ」では, ワorkshop 全体に対する講評があり, 終わりの言葉によって締めくくられた。修了証書の授与については, 後日学内便にて参加者に送付した。

c. アンケート結果

ワークショップ終了後に参加者 23 名を対象にアンケートを実施し, 参加者全員から回答を得た。図 1 にアンケート結果の一部を示している。また, 自由記述の代表的な回答は以下の通りである。

(1) 現在のあなたにとってレベルアップが必要なスキル・知識は何ですか。

- ◆ シラバス作成に関するスキル
- ◆ 学生の理解度を把握する方法
- ◆ オンライン授業におけるグループ学習, ディスカッションなどスキル
- ◆ オンライン授業で学生との双方向性を確保するための方法
- ◆ オンライン授業で試験を実施するスキル
- ◆ 教える内容の取捨選択も含めた全体的な授業設計スキル
- ◆ 講義の構成やスライドの作り方

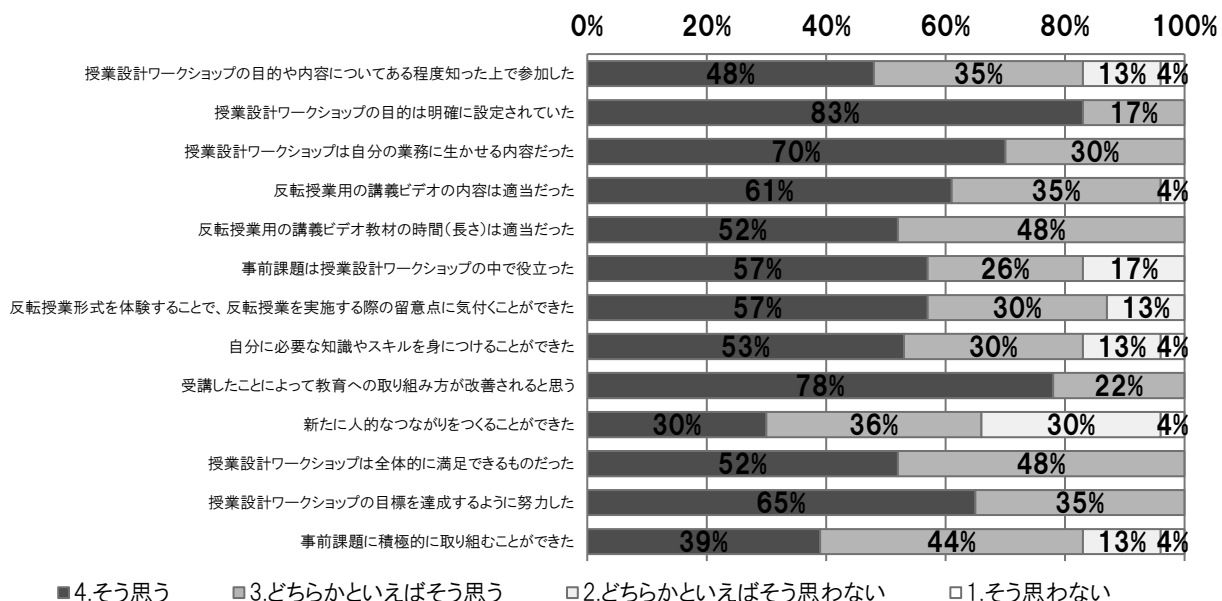


図 1 授業設計ワークショップアンケート結果 (n=23)

- ◆ 自身の教育理念の言語化
- ◆ 効果的な講義スライドの構成, 話し方, アクティブ・ラーニングの実施方法

- ◆ 動画作成技術

(2) 参加して良かったと思われる点を, 具体的にお書きください。

- ◆ シラバスの具体的な修正方針が理解できた
- ◆ 授業設計の重要性や工夫すべき点がわかった
- ◆ シラバスの書き方, 授業の内容を見直すことができた。他学部, 他分野の先生の取組を知ることができた
- ◆ 学生がシラバスを見ているということを知れた。また, シラバスの書き方についても勉強になりましたし, 今後自分の授業を改善するいいきっかけになった
- ◆ 事前事後学習, 到達目標, 評価法について理解できた
- ◆ 他学部の先生, その先生の授業のやり方などを知ることができた
- ◆ 他の先生の講義を体験でき, 自分の講義も見て頂き, 即時フィードバックで学修が効率的にできた
- ◆ オンラインの授業方法を学べ, 他の先生のやり方が参考になった
- ◆ 教育専門分野の先生, 他学部の先生のご意見や実際の講義が聞けて参考になった
- ◆ 他の先生の授業での工夫が分かった
- ◆ 違う分野の先生の講義を見ることができた
- ◆ 前期のオンライン授業に関する学生のアンケート結果や意見など, 最新の情報を知ることができた
- ◆ オンラインを運営の先生方や参加の先生が活用されていて参考になった
- ◆ 教員の友達が他学部にできた
- ◆ 新任の先生方とのつながりが持てたこと
- ◆ 自分の授業や授業計画の問題点を自覚できた。スタンプや匿名の書き込みなど, 知らない IT ツールを体験できた
- ◆ 自身が知らないデータを知ることができた
- ◆ 自分の授業がどういう位置づけにあり, 自分が何をしなければいけないかが明確になった
- ◆ 自分では見えていない盲点が分かった
- ◆ ティーチングポートフォリオの講義がためになった
- ◆ 一回, 通して学ぶ機会が持てたのは良かった
- ◆ とても勉強になった。オンラインならではの良さもあった。対面でも参加してみたかった
- (3) 研修をよりよいものにするために改善すべき点があれば, 具体的にお書きください。
- ◆ アイスブレイクの時間をもっと長くする
- ◆ 最初の自己紹介などの時間が少なく, 可能であれば最初はまだもう少し時間をとった方がよい
- ◆ ワークを時間通りに終了させるのが難しかった(対面ではもっと効率よくできそう)。グループ以外の先生のこと知りたかったです(アイスブレイクは全体で行っても良いかも)
- ◆ インタラクションの時間がより増えると良いと思う(1.3 倍程度)
- ◆ グループでの議論が短かったこと, グループでは, 最初に司会を決めておいた方がよい
- ◆ 学生の反応や行動の数値データは非常に有用だと思うので積極的に活用すると良いと思う
- ◆ 事前資料, 事前連絡の頻度と量が多過ぎるのは避けた方がよい。反転授業かプラスアルファ研修か選択できれば, 反転授業のありがたみが開始前によりわかるかもしれない
- ◆ 反転授業用の講義ビデオを視聴する時期を明記してほしい(間隔があき, 忘れていたため)。また, 視聴時のメモ(穴埋め形式など)も準備してくれると, より効果的だと思う
- ◆ 配付教材に番号があればわかりやすいと思う
- ◆ 「授業事例カード」のように, オンライン講義のためのティップスなどが集積されているページへの案内があるとよい
- (4) その他, お気づきの点があればお書きください。
- ◆ 今回のような Zoom や Teams でのグループ分けの方法を全教員に共有して欲しい
- ◆ とてもたくさんの学び・気づきが得られた
- ◆ 全体としては充実した研修であった。今後活かしたいと思う
- ◆ オンライン飲み会(懇親会)も設定したらどうでしょう

d. 成果と課題

図 1 のアンケート結果から、「授業設計ワークショップは自分の業務に生かせる内容だった」、「受講したことによって教育への取組方が改善されると思う」、「授業設計ワークショップは全体的に満足できるものだった」、「ワークショップの目標を達成できるように努力した」という設問では、全員が肯定的な回答をしている。また、自由記述における、参加してよかったと思われる点については、授業設計（計画、評価、シラバス作成など）の重要性が理解できたこと、オンライン授業の中で活用できそうなティップスが得られたこと、他の教員の授業が見られ、相互の意見交換が行われたことなどが記載されていた。これらの結果から、本ワークショップの目標として掲げている 4 点について、参加者はおおむね達成できたと推察できる。今年度は、大学における授業もほとんどオンラインで実施されており、本ワークショップも急遽オンラインで実施することとなった。これにより、参加者自身が担当する授業の中で活用できそうな工夫についても気づきがあったと考える。また、参加者に対して事前の案内や資料送付を丁寧に行ったことで、ワークショップの目的や内容を知った上で参加したという教員が多かった。昨年度の課題として挙げた、反転授業用の講義ビデオについても改訂したことで、教材に対する満足度も昨年度に比べて高くなった。

一方、課題としては、オンラインでの研修となったことから、参加者同士のコミュニケーションやワークの時間が十分に確保できなかったことによる改善点が挙げられた。実際に、アンケートにおける「新たな人的つながりを作ることができたか」という設問では、否定的な回答が昨年度に比べて多くなった。また、参加者と運営スタッフとのコミュニケーションも十分にとることができず、日常的教育活動にもつながっていく良好な関係を構築することが、例年に比べて困難であったと感じる。

次年度以降は、オンラインで実施したことによるメリットとデメリットを踏まえて、効果的なワークショップを計画していく必要がある。

4-2. 授業実践の振り返り

a. 目的

授業実践の振り返りは、日常的な授業における実践を振り返ることで、授業の設計・実施の見直し及び改善までの取組を支援するものである。教育力開発コースの対象者は、授業設計ワークショップの次に受講するプログラムであり、ワークショップで修得した内容を実践で活かすためのものである。

b. 概要

対象者は、自身が担当する授業のうち、ある 1 日の授業を 1 つ設定し、その授業の「①シラバス」、その日の「②授業計画書」を準備する。続いて、学生アンケート（指定様式）を実施し、アンケート結果を踏まえて、「③授業実践の振り返りシート」を作成する（図 2）。

対象者が作成した①②③の資料を基に、所属学部の FD 委員長が授業における PDCA サイクルが構築されているか否かの確認を行う。その後、全学の FD 委員会において、「③授業実践の振り返りシート」の内容について確認し、問題がない場合に承認を得る。この承認をもって本プログラムの修了とする。

c. 実施報告

2020 年度は表 3 の通り、6 名の教員が実施し、全員が FD 委員会において承認を受け、修了者に修了証を授与した。

4-3. 授業参観・授業研究会

a. 目的

授業参観・授業研究会は、個々の教員の実情に沿った具体的で日常的な FD を目指しており、授業の把握、授業の改善、参加者間での授業技術の共有を目的としている。

b. 授業参観・授業研究会の流れ

授業参観・授業研究会は、はじめに対象教員の授業を参観し、授業映像の撮影、学生アンケート（授業の理解度、良かった点、改善して欲しい点、先生へのメッセージについて）を実施する。その際に、高等教育研究センター教育改革推進部門の教員は、授業のポイントや気になる点などを記録する（授業内容のまとめ、時間経過、特筆するべ

教育力開発コース「授業実践の振り返りシート」		作成者： _____ 学部 氏名 _____ 授業名 _____	
◆ 作成した「シラバス」、「授業計画書」、実施した「学生アンケート」の結果を見ながら当てはまる□に✓を記入してください。			
項目	自己診断	FD 委員評価	実践の振り返り・学生の意見を踏まえての感想・改善すべき点など 教育改革推進部門に提出したいこと
1. 授業設計 作成したシラバスについて	<p>授業の目的について</p> <input type="checkbox"/> 学位授与の方針（DP：ディプロマポリシー）と授業との関連が記載されている <input type="checkbox"/> 学生を主体として記載されている <input type="checkbox"/> 授業が DP を達成するために必要であるかの存在意義が記載されている	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
	<p>授業の概要について</p> <input type="checkbox"/> 学部、または学科のがキョム上の位置づけが記載されている <input type="checkbox"/> 学生の知的好奇心を喚起するように記載されている	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
	<p>授業の到達目標について</p> <input type="checkbox"/> 学生を主体として記載されている <input type="checkbox"/> 学生が身に付けることができる能力も、学生自身がイメージできるように具体的に記載されている <input type="checkbox"/> 目標を一つ一つ独立させて記載されている（一つの文に一つの目標が記載されている） <input type="checkbox"/> 目標を表わす動詞は観察可能な行動で記載されている	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
	<p>授業計画について</p> <input type="checkbox"/> 目的・目標との整合性がなれている <input type="checkbox"/> 授業時間外にどのような事前・事後学習をするのが具体的に記載されている	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
	<p>成績評価方法・基準について</p> <input type="checkbox"/> 評価の機会や方法は複数で記載されている <input type="checkbox"/> 評価の方法と期間、実施時期が記載されている <input type="checkbox"/> 評価の配分割合が記載されている <input type="checkbox"/> 評価の基準が記載されている	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
2. 授業実施 作成した授業計画書について	<p>授業の到達目標について</p> <input type="checkbox"/> 1 箇分の授業で達成可能な数の目標が具体的に記載されている <input type="checkbox"/> 目標を一つ一つ独立させて記載されている（一つの文に一つの目標が記載されている） <input type="checkbox"/> 目標を表わす動詞は観察可能な行動で記載されている	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
	<p>授業計画について</p> <input type="checkbox"/> 導入・展開・まとめ構成されている <input type="checkbox"/> 口頭での説明だけでなく、必要に応じて、板書・スライド・教科書・教材などを活用している <input type="checkbox"/> 終始一方向的な解説のみで終わるのではなく、学生の能動的な思考や参加を促す工夫がなされている	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
3. 授業評価・改善 実施した学生アンケートについて	<p>学生の把握について</p> <input type="checkbox"/> 学生の授業に対する理解度（学生の自己評価）を把握することができた <input type="checkbox"/> 学生が授業で学んだこと、身に付けたことを把握することができた <input type="checkbox"/> 学生の授業に対する要望や意見を把握することができた	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	
4. FD 委員の承認	授業における PDCA サイクルが構築できているといえる <input type="checkbox"/>	<FD 委員からのコメント>	<FD 委員長署名> (_____ 学部 FD 委員長)

※ 授業実践の振り返りに際して使用する「シラバス」、「授業計画書」は**教育力開発コースのみで使用するため**、実際の授業のシラバス等を適切に修正しても問題ありません。ここで**修正したシラバスを作成者及び学生に開示することはありません**。
 ※ シートの記載において不明な点や、どのような改善が望ましいか、どのような改善方法があるかなどのお問い合わせは、**教育改革推進部門までご連絡ください**。

図2 授業実践の振り返りシート

表3 授業実践の振り返り修了者

承認日	学部・学科等	氏名	授業名	評価者（FD 委員）
7 月 14 日	医学部・医学科	坂根亜由子	生化学	常山幸一（医学部）
9 月 8 日	研究支援・産官学連携センター	垣田 満	研究支援職入門	齊藤隆仁（FD 委員長）
12 月 8 日	教養教育院	羅 成圭	ウェルネス総合演習	岩田貴（教養教育院）
2 月 9 日	総合科学部	渡邊克典	現代社会と生存Ⅱ	桑原 恵（総合科学部）
2 月 9 日	歯学部	高石和美	歯科麻酔科学 B	河野文昭（歯学部）
3 月 9 日	理工学部	渡辺公次郎	建築計画 2	長谷崎和洋（理工学部）

き発言や出来事など)。続いて授業研究会を実施する。ここでは、対象教員と授業を参観した教員が、授業内容について議論を行う。この中で撮影した映像を確認し、学生アンケートの結果を確認しながら、うまくいっている点や工夫されている点を共有し、困っている点を解決するためのアイデアについて意見交換を行う。

c. 実施報告

2020年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大による影響を受け、多くの授業がオンラインで実施された。また、クラスター（集団）感染が起こり

やすい、密閉空間、密集場所、密接場面（3密）を避けることが求められた。そこで、本年度に限り、代替措置として「授業実践の振り返り」を実施することで、教育力開発コースを修了できることとした。この措置により本プログラムの対象教員7名が実施し、全員がFD委員会において承認を受け、修了者に修了証を授与した。表4に「授業参観・授業研究会」の代替措置として実施した教員を示している。

表 4 授業参観・授業研究会の代替措置による修了者

承認日	学部・学科等	氏名	授業名	評価者 (FD 委員)
9 月 8 日	医学部・医学科	平山晃斉	解剖学 II (人体発生学)	常山幸一 (医学部)
9 月 8 日	生物資源産業学部	岸本幸治	生物資源産業学基礎英語	濱野龍夫 (生物資源産業学部)
11 月 10 日	医学部・医学科	兼松康久	くも膜下出血	常山幸一 (医学部)
1 月 12 日	薬学部	異島 優	薬剤学 I	柏田良樹 (薬学部)
2 月 9 日	医学部・保健学科	桑村由美	看護技術 IV	友竹正人 (医学部)
2 月 9 日	生物資源産業学部	岡 直宏	水圏生産科学	濱野龍夫 (生物資源産業学部)
3 月 9 日	理工学部	中田成智	耐震工学特論	長谷崎和洋 (理工学部)

4-4. ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ (TPWS)

徳島大学では 2011 年度より実質的な FD の取組を進めるため、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ (以下, TPWS)」を開催している。2017 年度までに合わせて 27 名が TPWS に参加した。参加者の満足度は非常に高く、教育改善に有効的であることが示されているが、例年参加者が少ないことが課題とされている。

2018 年度より、ワークショップ直前のキャンセルや参加申込がないなどの理由で、ワークショップを開催することができていない。参加者が少ない要因の 1 つに、TPWS が連続した 3 日間のワークショップであることから、参加する時間を確保できない、参加することに対する負担が大きいという点が挙げられる。徳島大学における TPWS は、ティーチング・ポートフォリオの質保証を目的にティーチング・ポートフォリオ・ネットワークが作成した「TP 作成ワークショップ基準」¹⁾に準拠している。これにより、参加者が作成するティーチング・ポートフォリオは、我が国において質が保証されたものとして認められている。したがって、単純にワークショップの時間を短縮したり、作成期間を分割して実施したりすることは難しい。

しかし、TPWS の参加者が少ないことや負担が大きいことは全国的にも課題となっており、近年では簡易版のティーチング・ポートフォリオを開発し、普及していこうとする動きが見られる。その動きの 1 つとして、教育実践の振り返りに焦点を当て、ワークシートを活用して 2 時間程度で、具体的な実践から自身の教育に対する理念を明確

にし、成果や課題、今後の目標を設定するティーチング・ポートフォリオ・チャートの作成が始まっている²⁾。2018 年度、2019 年度は「ティーチング・ポートフォリオ・チャート作成 WS」を開催し、参加者からは授業の振り返りができたことや日常の取組を可視化できたという意見が挙げられ、有意義であったことが示されている。しかし、簡易版であっても参加する教員は少ないのが現状である。今後は、教員がワークショップの内容や意義を理解できるように広報活動を行うことに加え、教員の教育業績に関する評価と関連させるなど、教員が教育実践を振り返るように、組織的な取組を行うことが重要であると考えられる。(吉田 博)

5. すぐ使える 90 分セミナー

a. 目的

「すぐ使える 90 分セミナー」は、アクティブ・ラーニングや新しい教育技術、教育ツールを全学的に普及していくために、教職員、大学院生を対象に教授学習に関するテーマでマイクロレベルの FD プログラムを計画的に実施するものである。また、学部の FD 委員会と連携することで、学部の FD プログラムとして実施したテーマでもある。さらに、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (SPOD) の FD プログラムとして、四国地区にも開放している。

b. 概要

表 5 に示した通り、10 回のセミナーを実施し、延べ 274 名の教職員、大学院生、学部学生が参加した。今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、全てのプログラムについて対面での実施を

表 5 2020 年度 90 分セミナー実施状況

日時	テーマ	講師	参加者数
4 月 23 日	学生の学習を促す	元高等教育研究センター	40 名
16:20-17:50	質問の作り方	川野 卓二	
6 月 25 日	著作権	高等教育研究センター 学修支援部門 EdTech 推進班	45 名
16:20-17:50		金西 計英	
7 月 30 日	授業外学習を促す	高等教育研究センター 教育改革推進部門	20 名
16:20-17:50	授業診断	吉田 博	
9 月 24 日	テキスト分析	高等教育研究センター 教育の質保証支援室	35 名
16:20-17:50		塩川 奈々美	
10 月 15 日	発達障害のある学生に配慮し	高知大学 大学教育創造センター	28 名
16:20-17:50	た授業づくり	杉田 郁代	
11 月 19 日	試験レポートの作り方	高等教育研究センター 教育改革推進部門	21 名
16:20-17:50		吉田 博	
12 月 17 日	入試の効果測定	高等教育研究センター アドミッション部門	29 名
16:20-17:50		関 陽介	
1 月 8 日	オンライン・グラフィック・	研究・産学連携部 地域産業創生事業推進課	13 名
10:30-12:00	ファシリテーション	玉有 朋子	
1 月 14 日	シラバス作成	高等教育研究センター 教育改革推進部門	13 名
16:20-17:50		吉田 博	
2 月 18 日	教学 IR	高等教育研究センター 教育の質保証支援室	30 名
16:20-17:50		塩川 奈々美	



図 3 「すぐ使える 90 分セミナー」実施風景

見送り、オンライン会議システムである Zoom を用いての開催となった。オンライン開催になったことで、一部プログラムは開催時期の変更を余儀なくされるなど多少の影響は受けたが、2020 年度に予定していたプログラムは全て実施することができた (図 3)。

c. 成果と課題

プログラム終了直後、参加者を対象にアンケートを実施し、164 名から回答を得た。アンケートの設問のうちプログラムの成果に関する 4 件法のアンケート結果は図 4 の通りである。アンケートの結果から、「今後の授業や教育活動に活かせる情

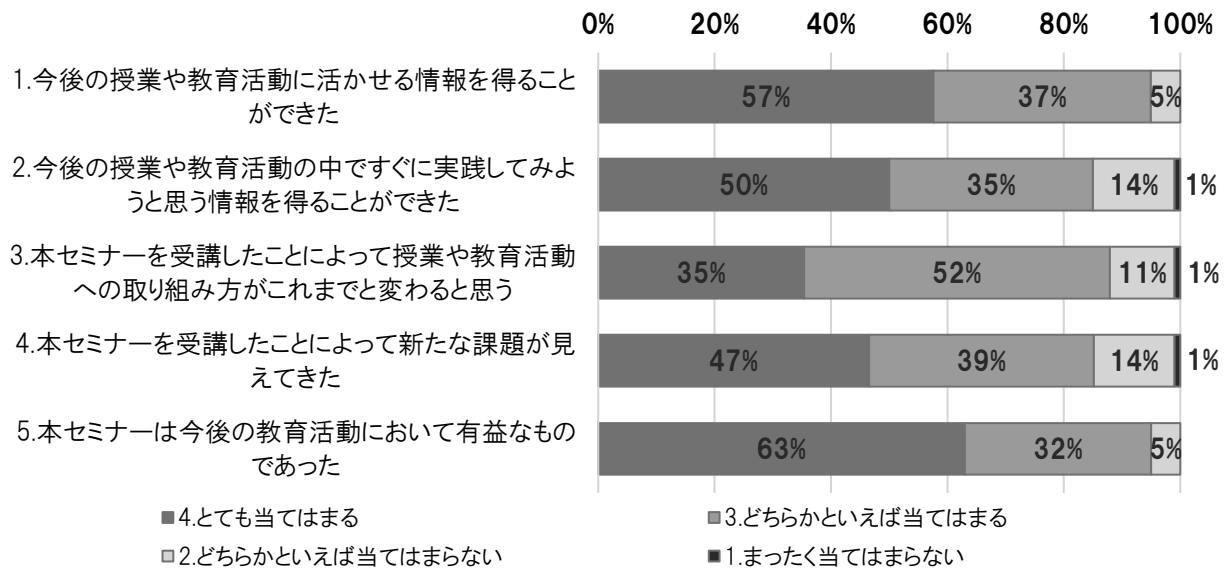


図 4 すぐ使える 90 分セミナーアンケート結果 (n=164)

報を得ることができた」、「本セミナーは今後の教育活動において有益なものであった」という設問では肯定的な回答が 90%を超えている。この他の設問においても肯定的意見が 85%を超えるなど、セミナーにおける全体的な満足度の高さも明らかとなった。このことから、本セミナーは参加者にとって有益であったことが窺える。本セミナーに参加して良かった点・有益であった点を記述式で問う設問では、「具体的な教育手法を例示してくれたため、即使えるテクニックも多彩であった」、「今までの自分自身の学生の対応に関して内省する場になった」、「試験問題の作成にあたって、今まで考えていなかった面を教えてもらった」などの意見が挙げられており、参加者は自身の教育活動において実践できる情報を得たり、テーマに関する具体的な取組やその背景について理解したりすることができたようである。また、学部 FD との連携や SPOD への開放、オンライン開催への対応を行ったことで、多くの教職員が参加した。学部の教職員にとっては、全学 FD よりも学部 FD の方がより親しみを感じやすい面があることから、学部 FD 委員会との連携による参加者動員の効果は高い。また、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けた結果であったものの、本セミナーがオンライン開催に順応したことにより、学外からの参加者も各プログラムにおいて一定数認められた。

実際の移動が不要な分、気軽に参加できることが学外参加者を呼び込むきっかけになったものと考ええる。

一方、課題としては、各プログラムのアンケートで示された改善点を修正していくことや、プログラム全体としてはセミナー受講後に実践できる情報提供をさらに盛り込むように改良をしていく必要がある。さらに、今後はオンライン開催を前提とする状況の継続が考えられるため、オンラインでの実施を見越したプログラム構成を検討する必要がある。教職員に有益な情報となるような新しいテーマを模索しつつ、参加者がすぐに実践できる情報を提供できるよう、プログラムの改善を行っていく。また、学部 FD 委員会との連携をさらに強化し、広報面においても積極的に情報提供を行うことで、参加者の増加を図りたい。

(塩川奈々美)

6. 大学で教育に携わる大学院生のためのワークショップ

a. 目的・背景

大学院博士（後期）課程の学生は、修了後に大学教員となる場合や、大学教員とならない場合であっても、将来的に身につけた高度な専門知識や技術を他者へ教授する機会が生じる可能性が高い。また、大学院生としての日常においても、研究室で修士課程の学生や卒業研究生に対する指導的立

場になることや、ティーチングアシスタント (TA) やリサーチアシスタント (RA) として教員と共に後輩の学習指導に当たる機会もある。このような状況から、大学院設置基準が一部改正され、2019 年度より博士 (後期) 課程の学生に対するプレ FD の実施又は情報提供が努力義務とされた。

そこで、2020 年度より新たに、全学 FD 推進プログラムとして、大学で教育に携わる博士 (後期) 課程の大学院生を対象に、近年の高等教育政策の動向、教育を行う際の基本的な知識をワークショップ形式で提供することとした。2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、Zoom によるオンラインで実施した。

b. 概要と成果

■開催日時

2020 年 9 月 18 日 (金) 13:30~15:00

■会場

Zoom (オンライン)

■概要

大学で教育に携わるスタッフ (教員, TA, RA など) として必要な基礎知識、高等教育政策の動向、徳島大学の教育方針、TA として授業に関わる際の一般的な業務や役割について解説した。また、徳島大学の博士 (後期) 課程の大学院生の進路に関する情報も提供した。最後に、参加者同士で各自が取り組んでいる教育活動に関する意見交換を実施した。

c. 成果と今後の課題

これまで徳島大学では、大学院生向けの FD プログラムとして、2018 年度に「TA を対象にした授業支援研修会」を実施し、2019 年度に「90 分セミナー」を大学院生を対象に加えて実施してきた。今回、徳島大学全学 FD 推進プログラムとして、プレ FD プログラムを計画したが、参加者が 6 名と少なく、大学院生のニーズに合致していた内容であったとは言い難い面がある。ワークショップ終了直後に実施した参加者アンケートでは、各設問ともに回答者全員から肯定的な回答を得られた (図 5)。自由記述からは、良かった点として「経験に基づいたアドバイスが頂けたのが嬉しかった」、「日本とアメリカの TA 制度の違いや、後輩指導についての助言を得られて勉強になった」という意見が挙げられており、改善点として「後輩指導のコツについて、もっと知りたかった」という意見が挙げられた。これらの結果から、概ね好評であったと言えるが、FD の参加者数もアンケートの回答者数も少ないことから、大学院生のニーズや現状に合わせた内容の再検討が必要であると考える。実際に、解説の後で実施した意見交換の際に挙げられた内容には十分に答えることができないものもあり、全学の教育支援系センターとして提供すべき内容であるか否かも検討し、今後もプログラムの改善を行っていく必要がある。

(吉田 博)

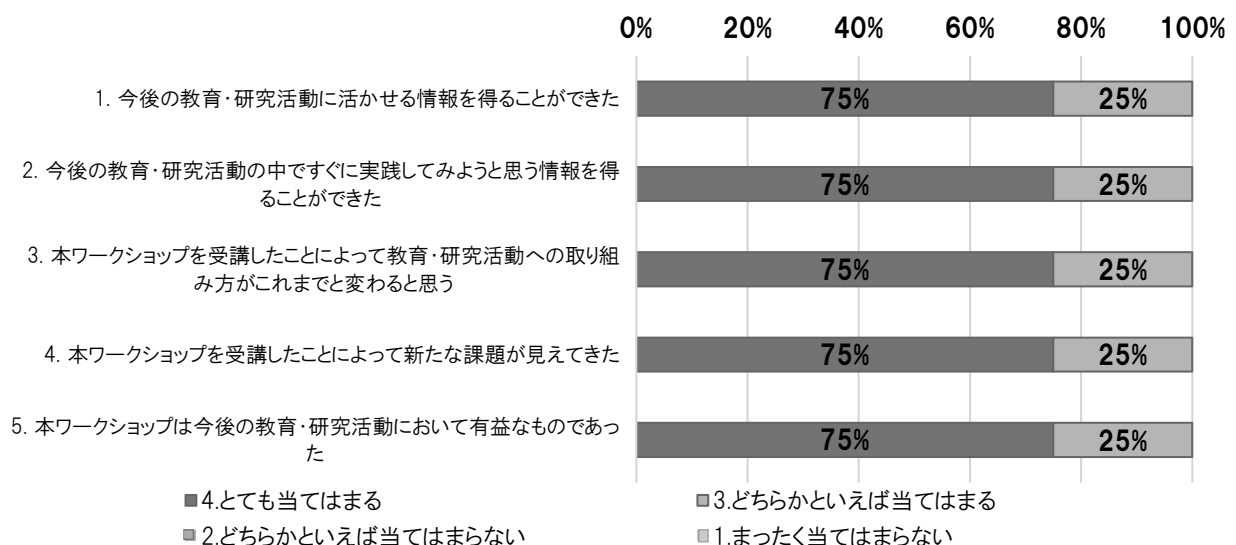


図 5 大学で教育に携わる大学院生のためのワークショップアンケート結果 (n=4)

7. 大学教育カンファレンス in 徳島

a. 目的

大学教育カンファレンス in 徳島は、教育実践や FD 活動の成果を検証し、高等教育における実践研究の取組や人的ネットワークを充実・発展させることを目的としている。高等教育機関で行なわれている教育実践の先駆的な取組を共有し、大学教育の質的向上に向けた成果を確認するものである。2005 年度から実施しており、今回で 16 回目となる。2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、Zoom によるオンラインで実施した。

b. 概要と成果

■開催日時

2021 年 1 月 8 日 (金) 9:00~17:45

■会場

Zoom (オンライン)

■概要

全体の参加者は学外からの参加者 59 名を含む、167 名であった。研究発表の件数は、口頭発表 15 件、ポスター発表 14 件、ワークショップが 2 件であり、特別講演が 1 件行われた (表 6)。

2020 年度は、当初対面研修として予定していた通りの内容をオンライン形式に変更して実施した。口頭発表、ポスター発表では、1つのアカウント内に Zoom のブレイクアウトルーム機能を活用して、発表会場またはポスターごとにルームを設置し、参加者は自由にルーム間を移動できるように設定した。ワークショップでは、それぞれの異なるアカウントにおいて実施し、ブレイクアウトルームを活用したグループセッションや web 上のアプリを活用した参加者同士のコミュニケーションがとられていた。特別講演は、福岡女子大学准教授の和栗百恵氏による「「ふりかえり」再考〜何のために「ふりかえり」ですか」と題した講演が行われた。アクティブ・ラーニングなどにより、学習したことや体験したことを、学生自身の学びとして捉えるために必要な、「学習の振り返り」について、理論的な解説や実践的な方法を学ぶことができた。

c. カンファレンスの成果と今後の課題

今年度は、大学教育カンファレンス in 徳島が始まって以来初めて、オンラインによる実施となっ

た。研究発表者や参加者への事前案内、Zoom アカウント内での画面共有による掲示、オンラインの技術的なサポートなどに関して、スタッフ間での検討を重ね、丁寧なサポートを行うことができた。実際に、参加者アンケートの自由記述からも、「スムーズな運営であった」、「ブレイクアウトセッションを使うやり方が参考になった」などの運営に関する意見が多く挙げられていた。また、参加者数も例年よりやや多く、特に学外からの参加者が多かった。オンラインで開催したことで、参加者の移動の負担がなくなり、気軽に参加できたことが要因であると考えられる。学外からの参加者が多いことで、研究発表者にとっては、普段とは異なる視点からの意見交換ができたのではないかと推察できる。また、徳島大学の取組を学外に発信する機会ともなったと言える。

カンファレンスでは、参加者を対象にアンケート調査を実施しており、終了後に web にて受け付け、72 名から回答を得た (回収率 43%)。カンファレンスの成果に関するアンケート結果を図 6, 7 に示している。「カンファレンスは全体的に満足できるものだった」について、約 97%が肯定的な回答をしており、全体的に肯定的な回答が例年に比べて多くなっている。自由記述の設問「参加して良かったと思われる点をお書きください」では、それぞれのプログラムについて、新しい気づきがあったことや参考になったという意見が多く挙げられていた。また、オンラインで実施したことで、理解しやすかった、資料が見やすかったという意見も多く挙げられていた。

一方で、課題としては、オンラインでの運営に関する意見が挙げられた。参加者への案内、掲示、ブレイクアウトルームの設定、音声の問題などが挙げられており、改善すべき点も多々あることが分かった。次年度以降は、対面でのカンファレンスの開催を計画しているが、オンラインで実施する際には、今年度の改善点を活かした運営ができるように、準備していく必要がある。また、研究発表の申込者数が多い方が、全体の参加者数や満足度にも影響を与えていることから、研究発表の申し込みを促すような広報を引き続き検討していく必要がある。(吉田 博)

表 6 2020 年度 大学教育カンファレンス in 徳島プログラム

12 : 00 ~ 13 : 00	休 憩
ポスター発表 (第 1 部) <開催場所: A 会場> 座長: 吉田 博	
P ①	中学生へのオンラインデザイン思考教育の取り組みと効果 総合科学部地域創生コース 3 年 前田 晏里 他
P ②	歯科補綴学授業におけるアクティブラーニングの学修効果 —オンライン授業と TBL 授業の比較— 大学院医歯薬学部 大倉 一夫 他
P ③	歯科補綴学実習における新型コロナウイルス感染症対策について 大学院医歯薬学部 細木 真紀 他
P ④	COVID-19 が技術指導に及ぼした影響とその効果 理工学部機械科学コース 3 年 博多 温輝 他
P ⑤	大学在学中の積極的な活動が就職後のキャリア発達に及ぼす影響 理工学部情報光システムコース 4 年 十亀 太雅 他
P ⑥	AI/IoT 基礎力養成—課題解決・アイデア創出に繋がる教材開発— 技術支援部 辻 明典 他
P ⑦	徳島大学における初年次教育「SIH 道場」の取組とその成果 高等教育研究センター 塩川 奈々美 他
ポスター発表 (第 2 部) <開催場所: A 会場> 座長: 吉田 博	
P ⑧	徳島大学イノベーションプラザにおける技術・運営マネージャー育成法の検討 生物資源産業学部生物生産システムコース 3 年 岡崎 優太 他
P ⑨	高大連携事業「高校生の大学研究室への体験入学型学習プログラム」実施報告 教養教育院 渡部 裕
P ⑩	イノベーション教育のオンラインにおける影響について 高等教育研究センター 森口 菜梨聖 他
P ⑪	社会で即戦力として活躍できる技術者育成方法の提唱 高等教育研究センター 亀井 克一郎
P ⑫	Culture-oriented language teaching: A new experience with online classroom 異文化理解の語学教育～遠隔授業での体験 高等教育研究センター チャン ホアンナム
P ⑬	VR 動画撮影を用いた日本語・日本文化授業の実践報告 高等教育研究センター 清藤 隆香
P ⑭	manaba を活用した初年次情報教育の実践 阿南工業高等専門学校 創造技術工学科 小林 美緒 他
14 : 00 ~ 14 : 15	休 憩

2020 (令和 2) 年度 第 16 回大学教育カンファレンス in 徳島プログラム
会期: 2021 年 1 月 8 日 (金) 会場: オンライン開催 (Zoom)

8 : 30 ~ 9 : 00	受 付
9 : 00 ~ 9 : 10	学長挨拶 野地 澄晴 司会: 吉田 博
研究発表 I (口頭発表)	
9 : 15 ~ 10 : 15	<div> <div> 口頭発表 A 座長: 友竹 正人 <A 会場> A ① 9 : 15 ~ 9 : 35 ■ コロナ禍における理学教育の高大接続事業 理工学部理工学科 応用理数コース 三好 徳和 A ② 9 : 35 ~ 9 : 55 ■ 徳島大学生のオンライン授業に関する意識と今後への提言 人間環境大学 松山看護学部 岡 多枝子 他 B ② 9 : 35 ~ 9 : 55 ■ コロナ禍におけるクラス担任による学生支援の実態 高知大学 大学教育創造センター 杉田 都代 B ③ 9 : 55 ~ 10 : 15 ■ 公衆衛生看護学のオンライン授業の展開における可能性と課題 人間環境大学 松山看護学部 藤田 碧 他 </div> <div> 口頭発表 B 座長: 齊藤 隆仁 <B 会場> B ① 9 : 15 ~ 9 : 35 ■ COVID-19 下のハイブリッド授業 —SDGs を導入した Active Learning の実践研究— 大学院医歯薬学部 桑村 由美 他 </div> <div> 口頭発表 C 座長: 菊山 幸一 <C 会場> C ① 9 : 15 ~ 9 : 35 ■ 看護大学生の口腔ケアについての認識・自己管理行動および臨床実習での体験—2020 年度調査 大学院医歯薬学部 桑村 由美 他 </div> </div>
	休 憩
10 : 15 ~ 10 : 30	ワークショップ A <A 会場> ◆ オンライン・グラフィック・ファシリテーション 研究・産学連携部 玉有 朋子
10 : 30 ~ 12 : 00	ワークショップ B <B 会場> ◆ オンラインでインプロを体験してみよう! —演劇的知を教育実践に— 教養教育院 Gehrtz 三園友子 他

研究発表Ⅱ (口頭発表)	
14 : 15 ~ 15 : 35	<p>口頭発表A 座長：河野 文昭 〈A会場〉</p> <p>A④ 14 : 15 ~ 14 : 35 ■徳島県と徳島大学の合同進学セミナー in Zoom の実施と今後の展望 ー対面開催との比較を通してー</p> <p>高等教育研究センター 上岡 麻衣子 他</p> <p>A⑤ 14 : 35 ~ 14 : 55 ■大学生の主體的な学びへのメタ認知の影響についての検討</p> <p>高等教育研究センター 金西 計英</p> <p>高等教育研究センター 清藤 隆春 他</p> <p>B⑥ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■オンライン PBL チュートリアルの実施 報告ならびにその効果と課題</p> <p>大学院医歯薬学研究部 西田 憲生 他</p>
	<p>口頭発表B 座長：桑原 恵 〈B会場〉</p> <p>B④ 14 : 15 ~ 14 : 35 ■ミニレポート相互閲覧を用いたオンデマンド型アクティブラーニングの試行</p> <p>教養教育院 南川 慶二</p> <p>B⑤ 14 : 35 ~ 14 : 55 ■オンライン海外留学の実施と効果の検証 ーBEVI および事後アンケートによる分析ー</p> <p>大学院社会産業理工学研究部 矢部 拓也</p>
	<p>A⑦ 15 : 15 ~ 15 : 35 ■学生による授業評価とそれを用いた授業改善の課題 ー顧客ロイヤルティ指標応用授業評価の可能性ー</p> <p>阿南工業高等専門学校 創造技術工学科 坪井 泰士 他</p> <p>B⑦ 15 : 15 ~ 15 : 35 ■コロナ時代における ZOOM による遠隔授業のあり方 ー1 年生必修キャリアプラン入門を事例としてー</p>
	<p>休 憩</p>
15 : 35 ~ 15 : 45	<p>特別講演</p> <p>演題：「ふりかえり」再考～何のために「ふりかえり」ですか 講師：和栗 百恵 先生 (公立大学法人福岡女子大学 国際文理学部 准教授) 司会：吉田 博</p>

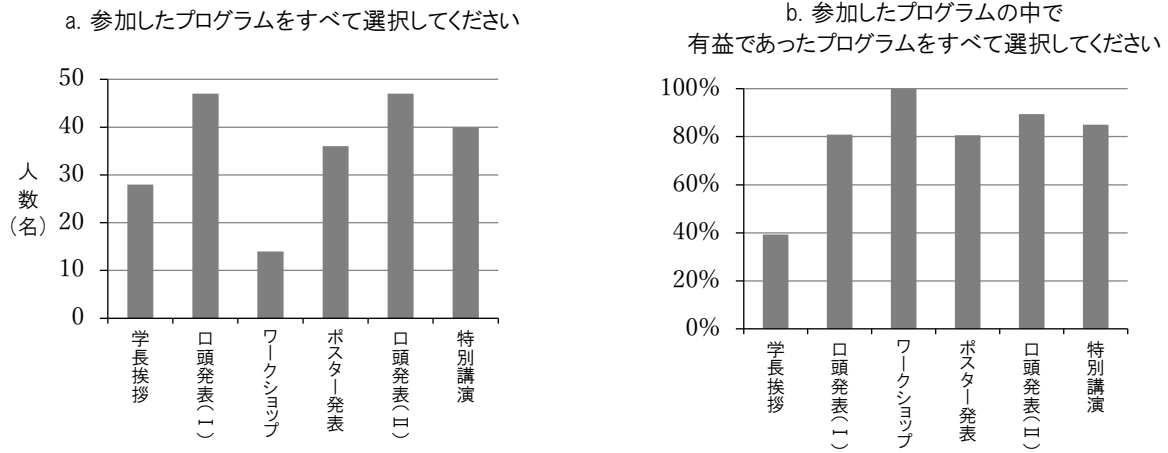


図 6 大学教育カンファレンスで参加したプログラムについて

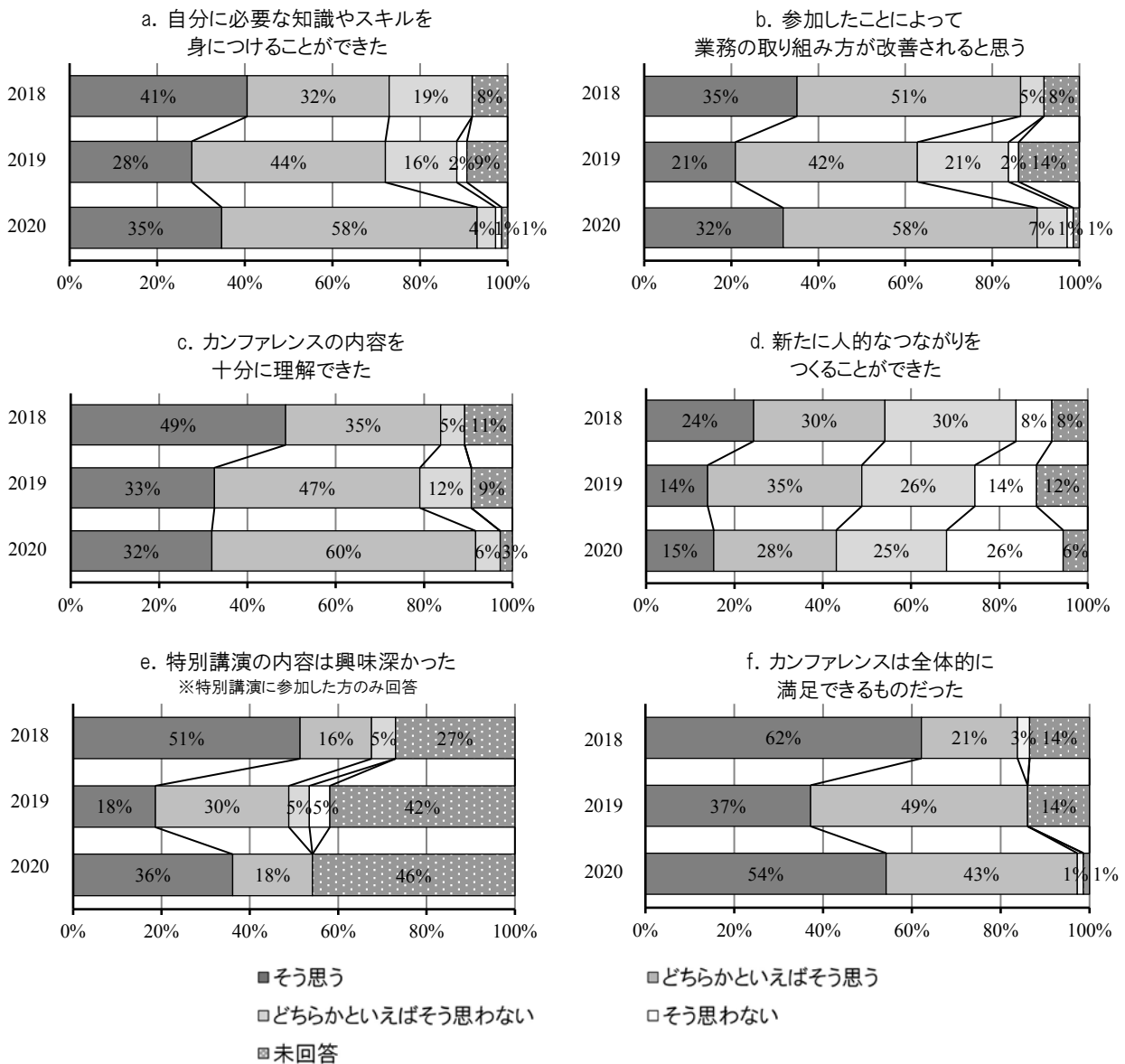


図 7 大学教育カンファレンスアンケート結果（過去 3 か年分）

8. SIH 道場担当者 FD

SIH 道場授業担当者が SIH 道場の設置背景となる大学教育再生加速プログラムの概要や自身が担当する SIH 道場の詳細について理解を深め、SIH 道場の授業を担当するために必要な知識と技能を修得するために、「2020 年度 SIH 道場授業担当者 FD」を開催した。

SIH 道場とは、本学で開講する全学初年次教育プログラム「SIH 道場～アクティブ・ラーニング入門～」を指す。本学が 2014 年度に採択された文部科学省大学改革推進等補助金事業「大学教育再生加速プログラム（テーマⅠ：アクティブ・ラーニング）」の取組として 2015 年度から導入された。全学 1 単位必修の科目であるが、内容はそれぞれ専門分野毎に異なり、i：専門分野の早期体験、ii：ラーニングスキル（文章力・プレゼンテーション力・協働力）の修得、iii：学修の振り返り、これら 3 つの目標が共通する授業設計項目として設定されている。

授業担当者は原則として年度ごとに交代することになっているため、本 FD は毎年度実施し、義務に近い形での参加を呼びかけてきた。2020 年度より、SIH 道場のマネジメントは完全に SIH 道場の実施単位である各学部学科等に委ねられるため、本 FD への参加も完全に任意となるが、部局独自の SIH 道場実施に向けた授業担当者への情報共有の場としても重要な意味合いをもつ。本節では、こうした位置づけである「2020 年度 SIH 道場担当者 FD」の実施概要を報告する。

a. 目的

本 FD の目的は、授業設計コーディネーター、SIH 道場授業担当者が SIH 道場の概要とともに、SIH 道場で役立つ教育手法やそのツールについて学ぶ機会を提供することにある。参加者に SIH 道場の概要のほか、2019 年度より導入されたポートフォリオ機能を搭載した新教務システムの概要や利用方法の説明、学生の学修を促す授業設計としてアクティブ・ラーニングの理論や授業のチェックおよび振り返りに関する方法を学んでもらうことで、SIH 道場の円滑な実施・運営の支援を目指す。本 FD の目標は次の 3 つである。

- ① 大学教育再生加速プログラムの概要、当該学科の SIH 道場の詳細について理解する。
- ② SIH 道場の授業を担当するために必要な知識と技能を習得する。
- ③ OJT 型の FD として、授業実施から振り返りまでのプロセスを理解し、実践できるようになる。

b. 概要

■開催日・会場

<常三島キャンパス>

日時：3 月 12 日（木）16:30-17:30

場所：地域創生・国際交流会館共用室 301

<蔵本キャンパス>

日時：3 月 13 日（金）16:30-17:30

場所：総合研究棟 2 階スキルスラボ 8A-8D

本 FD の対象者は 2020 年度 SIH 道場の授業担当者であり、常三島キャンパスおよび蔵本キャンパスでそれぞれ 1 回ずつ開催した。補助金期間中、その年度の授業設計コーディネーターは本 FD への参加を義務としていたが、補助金期間終了後となる本年度よりその参加は任意としている。

■参加者

今年度の参加者は、教員 50 名である。

■運営メンバー

運営メンバーは、高等教育研究センター教育改革推進部門を含め、詳細は次の通りである。

氏 名	所 属	職 名
川野卓二	教育改革推進部門	部門長・教授
吉田 博	教育改革推進部門	講 師
塩川奈々美	教育改革推進部門	特任助教
金西計英	学修支援部門 EdTech 推進班	教 授
高橋暁子	学修支援部門 EdTech 推進班	准教授

■内容

各 4 回の実施日において、表 7 のプログラムを実施した。

■全体の流れ

「SIH 道場の概要」では、SIH 道場の目標、内容、実施体制、授業設計の必須項目、教育改革推進部門及び SIH 道場コンテンツ作成 WG の提供する教材について説明を行った。さらに、SIH 道場の改

表 7 2020 年度 SIH 道場担当者 FD

時間	内 容	詳 細 項 目	担当者
15 分	SIH道場の概要	①目的・概要 ②スケジュール（設計→実施→振り返り）	塩川奈々美
20 分	新教務システム	①システムの概要 ②利用の仕方	金西計英 高橋暁子
25 分	学生の学習を促す授業設計	①アクティブ・ラーニングとは ②授業のチェック及び振り返り	吉田 博

善に向けた評価として、学生及び、教員アンケートの実施結果や授業設計コーディネーターが行うプログラム設計評価シートによる振り返り内容に関する情報共有を行った。

「新教務システム」では、新たに導入された教務システムの機能やその利用方法について説明を行った。本システムは、学生の教務情報と連結しており、e ポートフォリオシステムの機能も有することから、学生が日常生活において振り返りを実践することができるよう、その活用が期待されている。参加者からも積極的に質問が行われ、授業での活用について議論がなされた。

「学生の学習を促す授業設計」では、アクティブ・ラーニングの理論・実践に関する解説や、学生の学習を促すために役立つ授業設計について説明が行われた。本学におけるアクティブ・ラーニングの授業実践事例をまとめた「学生の学習を促す事例カード」を取り上げ、アクティブ・ラーニングの実践方法に関する紹介を行うなど、授業設計や実践のための参加者への情報共有を行った。

c. アンケート結果

FD 終了後に研修内容に関するアンケート調査を実施した（図 8、回収率は 92.0%（ $n=46$ ））。

d. 成果と課題

アンケート回答者のうち、参加者の職種は「教員（SIH 道場授業担当者）」は 60.9%、「教員（授業設計コーディネーター）」は 10.9%、「職員」は 17.4%、「その他」が 10.9%であった。例年開催している本 FD への参加経験については 47.8%が「以前参加したことがある」と回答しており、過半数は「今年度が初めての参加」と回答した。

SIH 道場担当者 FD について質問した結果、「SIH 道場の目的の理解」や、「学生の到達目標に関する

理解」「アクティブ・ラーニングの理論や効果への理解が深まった」「本 FD の全体的な満足度」に対する肯定的意見は 90%を超えた。「SIH 道場の過去の実績に関する理解」「学生の授業時間外学修を促す授業設計に関する理解」についても、84～85%の参加者が理解できたと回答した。

本 FD に関する自由記述を見ても、

- 教材等についての情報が得られた。参考にしてみたい。
- 大変勉強になりました。役立ち事項を得ることができました。
- 最近のことがある程度わかりました。
- 限られた時間の中で要点がわかりやすく説明されていたことが良かった。システムの廃止や導入等の知識が増えて役に立った。SIH 道場に関わらず、ポートフォリオの説明は必要だと感じた。

（下線は筆者による。以下同じく。）

など、FD の内容に満足いただけた声が窺えた。SIH 道場の業務に関する FD として、概説的に SIH 道場に関する情報を共有することができたと言える。一方、SIH 道場に対する高等教育研究センター側の認識と各学部学科における教員の認識との間の齟齬を指摘する意見も寄せられた。

- 高等教育研究センターの先生方が思われている程、各コースの SIH 道場担当者は目的や目標、授業設計について内容・理念を共有できていないと思う。特に授業設計の参考となる情報・コンテンツの閲覧できるサイトを教えてほしい。
- 学生側は情報過多、詰め込みになっている点も考慮して頂けたら幸いです。（実際そう聞きます。）

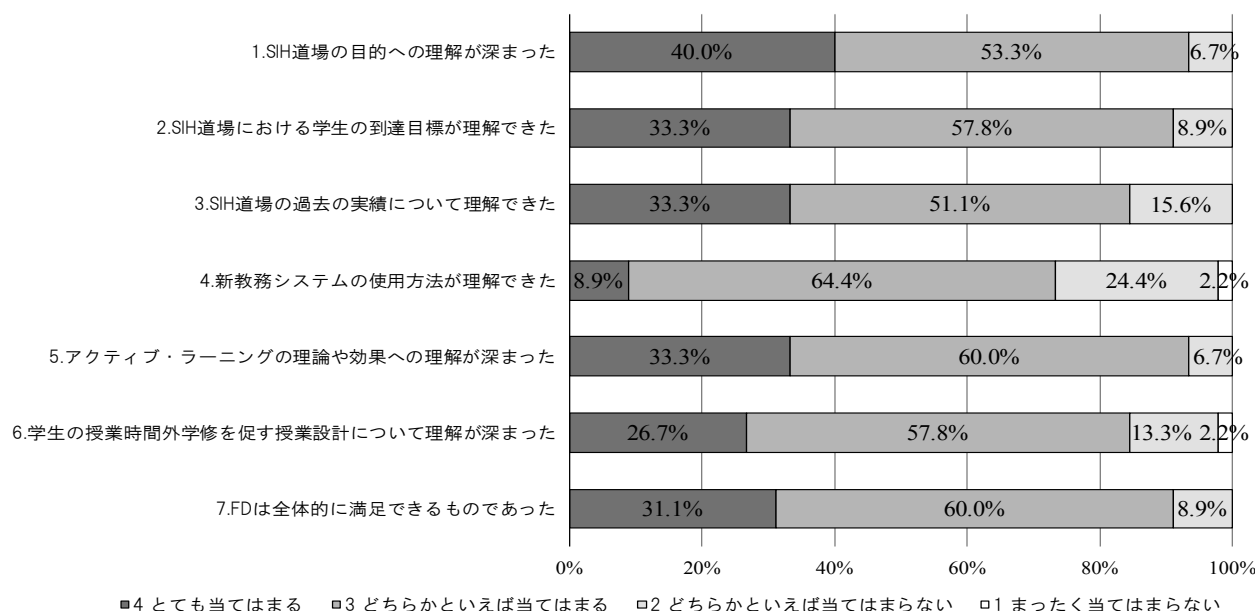


図 8 2020 年度 SIH 道場 FD アンケート結果 (n=46)

SIH 道場は 1 単位必修の科目だが、共通の授業設計に従って授業を行わねばならず、その枠組みに準拠した結果、SIH 道場実施への負担感や学生の履修疲れに繋がっている状況が指摘された。こうした授業設計に関する課題については、大学教育委員会やプログラム評価委員会などを通じて、適宜見直しの議論を行っていききたい。

また、「新教務システムの使用方法への理解」については他項目に比べ肯定的意見が低い割合にとどまった。こうした教材や LMS は実際に使用中で使い方を理解していくものであり、その活用方法も様々であることから、FD における紹介すべてを理解いただくことは難しい。先に引用した自由記述からもわかるように、説明内容に関する満足度は得られていることから、日常の業務において実際に利用する中で出てくる疑問点などを解消するような支援が求められるだろう。

奇しくも 2020 年度の SIH 道場は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、対面授業の実施が困難であった。オンライン授業への対応が突然求められた状況下で、本年度の担当者がどのように対応したのか、実態調査を実施し、「2021 年度 SIH 道場授業担当者 FD」において次年度担当者への情報共有を図りたい。(塩川奈々美)

参考文献

- 1) 佐藤浩章・中井俊樹・小島佐恵子・城間祥子・杉谷祐美子編 (2016)『高等教育シリーズ 171 大学の FD Q&A』pp.63-64, 玉川大学出版部
- 2) 川野卓二・久保田祐歌 (2015)「徳島大学の教学マネジメントと AP 採択事業「SIH 道場」による全学へのアクティブ・ラーニング展開の試み」『大学教育と情報』2015 年度(3), pp.19-21, 私立大学情報教育協会
- 3) 久保田祐歌・吉田博 (2016)「学修の振り返りを促進する授業設計：アクティブ・ラーニング型初年次教育プログラムの事例から」『京都大学高等教育研究』(22), pp.115-118, 京都大学高等教育研究開発推進センター